

キリスト教の変容①

カトリック信仰の諸相

一口にカトリック信仰といっても、それにはさまざまな様態があつて決して一枚岩でないということは、たとえば特定の教団信者がおしなべて同じ信仰心をもっているとは限らない、という当たり前のことを想起すれば理解しやすいかもしれない。

ブラジルをはじめ、広くラテンアメリカでは日曜日の朝、カトリック教会の礼拝に足繁く運ぶ人を見かける。規模は異なるとはいえ、街角に建てられた教会の入り口から人が溢れ出る光景は珍しくない。日本人がそのような姿に出くわすと、ブラジル人はどれほどカトリック信仰に熱心なのかと思うのである。

しかし、普段の生活で何気なくあなたの宗教は何かと尋ねると、「私はカトリック信者だが、プラチカンテ (praticante: 実行するという意味で「熱心な信者」の意味) ではない」と答える人が多い。すなわち、そのように語る人々は自分が名目信者であつて、毎週日曜日のミサに参列するほど信仰心は篤くないということを知っているのである。ある調査によれば、いわゆるプラチカンテは、カトリック信者全体の3割程度だと言われている。

ブラジルの宗教人類学者カマルゴによれば、プラチカンテとは、ある程度の教育を受け、幼い頃から教会で聖書について学んだ人々だとされる。新宗教に入信した人であつてプラチカンテだつたという人は聖書の言葉を必ずといっていいほど引用する。このことは、聖書を重要な教化戦略として用いてきた、カトリック教会のいわばエリート的な歴史的産物がプラチカンテだということを意味するのだろう。ここで仮に、こうした信仰形態を「経典的カトリシズム」と呼んでみよう。実はこうした信仰のありかたは、ブラジルでそれ程歴史が深いわけではない。なぜなら、バチカンを中心とする各地域のカトリック教会で、民衆を中央集権的に教化・教導することが目されたローマ化 (romanização) が始まったのは19世紀以降のことだからである。これについては後述する。民衆レベルで「聖書」が語られるようになったのは、ブラジルの500年のキリスト教史では比較的新しいことなのである。

フォークカトリシズム

それでは、ローマ化される以前の民衆のカトリシズムはどのようなものだったのだろう。それは、フォークカトリシズムと呼ばれる民衆主導の信仰形態で、今もなお脈々と続けられているものである。植民地期を通じてイルマンダージ (irmandade) やコンフリアリーア (confraria) と呼ばれる民衆の講組織がつくられた。そこでは専らカトリック聖人に対する献身的な宗教儀礼が行われるが、通常それらに教会権力が及ぶことはなく、祝祭を中心とする人々の純朴な信仰が実践されるのである。こうした民衆レベルの信仰が、ブラジルの宗教史で長らく続けられてきたのだ。現在でも農村地域のみならず、都市部の周縁地域では、そうした信徒組織が営まれている。

ブラジルでは1960年代に都市人口が農村人口を上回るようになった。つまり、全国的に眺めればそれまで農業に携わる人々の割合は高く、プランテーションやそれが拡大して生まれた村や町で暮らす人々が多かつた。日本語で大農園と訳されるとは

いえ、プランテーションとは実質的には一つの行政単位に比肩する村落共同体である。農場主は自費で教会を建て、お抱えの神父を自宅に住ませるか、大切なミサの時にのみ遠くの村から神父を呼ぶことが多かつた。「たくさん祈るがミサは少なく、多くの聖人に神父少なし」という諺があるが、これは植民地期以降始まるプランテーションにおけるブラジルの宗教状況をうまく説明している。そのようにして醸成されたカトリック信仰がいわば「エリート」としてのプラチカンテの経典的カトリシズムと異なるのは当然のことだつた。それは祝祭的で感情的・感情的に理解・実践される信仰なのである。

経典的カトリシズムは成功したのか？

さて、ブラジルのカトリック教会では、19世紀半ばに「改革派」と呼ばれる司教らがフォークカトリシズムを統一的カトリック (catolicismo universal) に修正しようとし、第一バチカン公会議 (1870年) 以降、ローマ化が推進された。それより少し前の1840年代はじめには、ラテンアメリカで聖職者の移民の第一波が受け入れられている。これは植民地期以降長らく続いていた聖職者不足を補うもので、カトリック教会の中央集権的体質をさらに助長することになった。このようなローマ化は、民衆による巡礼やフェスタ・ジュニーナ (6月の祭) などを迷信だと見做して排除しようとしたのである。

政教分離後、国家の庇護を失ったカトリック教会は制度的に弱体化したためにローマ化と保守化をさらに進めた。そして、国家との新たな同盟関係を模索するなか、都市中産階級の機関となりつつあつたヨーロッパの教会をモデルにすることを選んだ。これら一連の動向は、人口の大多数を占める地方の下層階級とその「非正統的」な民衆の宗教性を無視することを意味した。1920年代、公的にはローマ化したカトリシズムが都市を中心に支配的になり、フォークカトリシズム的な信仰は司祭のいない周辺部の地域に追いやられていくことになる。とはいうものの、先述したように「私はカトリックだが、プラチカンテではない」、あるいは「葬式信者」 (católico de sétimo dia) という表現が存在するように、ブラジルでは因習的なカトリック信者の割合が高い。このような信者の存在は、カトリックアイデンティティの形骸化というよりも、カトリックのローマ化がそれほど浸透しなかつた結果にすぎないと理解すべきだろう。

さて、ブラジルの社会調査を行う私的機関であるギャラップ社による宗教意識の調査結果 (1991年) によると、「毎週ミサに出席するカトリック信者」のうち45.9%の人たちが輪廻転生を信じている。カトリックでは「輪廻転生」が認められないにもかかわらずである。ブラジルで輪廻転生を唱えるのは、日本の宗教もさることながら、カルデシズムやウンパンダなどである。調査結果は、カトリックの世界観とそれらの宗教信念の混交を示していると思われる。さらには、ニューエイジ的な影響も見逃すことはできないだろう。このようなことから経典的カトリシズムがブラジルのカトリック信者に浸透している割合はそれ程高くないと見做されるのである。